

私は小さいころ、本があまり好きではなかったと思う。どちらかというとじっとして本を読んでいるよりも、外で駆けずり回っている方が面白かったからだ。そんな私が本をよく読み始めたのは小学校の高学年になってから。きつかけはあまりよく覚えてないけれど、いつしか私は本の中の魅力に取りつかれていった。そして気づけば、週に一度はほぼ必ず図書館に行くようになっていた。

図書館というものは不思議なところ、独特の雰囲気を持っている。たくさんの本の新しいものや古いものの紙の匂い。ものすごく静かでもないけれど、騒がしいということもない。嫌いな人にはとことん嫌いな場所なのだと思うが、私にとつて魅力的で落ち着けるスペースだった。

学生のころ、場所は違う図書館だったが、一度インターンシップをさせてもらったことがある。利用者としてではなく、仕事として体験してみたくなったからだ。その時、大がかりな館内の工事をするために閉館していた大きな図書館と、地区の小さな図書館の二か

わたしと 図書館



渡辺菜摘

所で働かせてもらった。閉館中の図書館では、主に本の移動作業がほとんどだったが、地区の図書館では実際にカウンター作業など利用者と接する仕事をした。慣れない図書館だったため対応に戸惑うことも多かったが、名札を見て学生と気づき、「頑張つて」と声をかけられることもあった。中でも一番記憶に残っているのが小さな子どもたちのためのお話会で、そこで私は絵本の読み

手を任された。何度も練習した後、当日お話会が始まると、ある子は真剣に、ある子はちょっと周りに気をとられながら、しかし絵本の中に夢中になって聞いてくれた。終わった後、その絵本を何人かが借りていくつくれ、そこに司書の方々のちよつとした努力があるのだと感じた。

近ごろ本を読む人が少なくなってきたと言っけれど、きつかけさえあればもっと興味を持ってくれる人が多いはずだ。司書の方々と、私たち利用者で、もっとよりよい図書館を作っていけたらと思う。

ためます「よい図書館」づくりを

「退職にあたって」

図書館長 小池 博

私事で大変恐縮ですが、三月末日をもって定年退職いたします。旧田無市立中央図書館に奉職して以来、三十五年間にわたつて皆様にご指導いただきありがとうございます。一日、一日とその日が近づいてくるこのごろの心境は複雑ですが、気持ちの整理を含めて何か書き残しておきたいと思っております。

私は、図書館には「理想の図書館」と「よい図書館」の二つがあると常々考えてきました。

「理想の図書館」は、北天に輝いて動くことのない北極星のようなもの。古来、大洋を渡る航海者たちは、たどり着くことにはない北極星を航海の指針としました。

私たちは、「理想の図書館」を目指すしながら、ためます「よい図書館」をつくり続けていきたいと努めます。「よい図書館」は、望み続け、歩みを止めなければ、必ず実現できる図書館です。

忘れられない言葉があります。「建つて百年もすれば、図書館はそれらしい顔になる」

これは、十数年前に訪問した米国ボストン市立図書館のライブラリアンがさりげなく語ってくれた言葉です。あれからなおときが過ぎました。

ボストンの図書館は、建つてから百五十五年になるはずで

西東京市図書館はまだ三十五年の歴史をもつにすぎません。これからどれほどの「よい図書館」に成長していけるか、前途が楽しみです。

わずか三十数年の間にも、この図書館にはいくつもの転換のときがありました。振り返ってみると、あのとき図書館は変わり始めたのだと懐かしく思い返すことがあれこれあります。

図書館がいま抱えている課題のひとつひとつに、毎日の実践のなかで着実に取り組んでほしいと願います。あきらめずに抱き続けてきた夢に近づくために力を合わせてほしいと願います。

西東京市図書館が「よい図書館」であり続けるために、皆様の暖かいお力添えをよろしく願います。

◆編集後記◆

二ページで紹介した短冊を見つけたときは、「YA!ペ」を大切に思ってくることがうれしくて、本当に感激しました。紙面上でのやりとりは文字だけですが、出会ったことのない人同士がつながっている様子が見えるようです。アナログ的ではありますが、YA世代の人たちのコミュニケーションの場のひとつとして、これからも「YA!ペ」を楽しんでもらいたいと思います。